

女子青年の自己犠牲・自己優先と扶養意識

杉山 佳菜子

要旨

本研究では女子学生の介護場面の自己犠牲・自己優先の行動の判断と扶養意識との関連を検討した。調査協力者は152名の女子学生で平均年齢は19.2歳(SD=2.9)であった。自己犠牲行動の方が決定の重要度の得点が高く、自己決定感や満足度では自己優先行動の得点が高かった。女子学生は自己優先の行動の方を認めていることがうかがわれたが、近年の学生が6年前の学生と比べて特に自己優先的であるとはいえなかった。さらに、扶養意識との関連について検討した結果、「自己犠牲タイプ」も「自己優先タイプ」も同じように扶養の必要性は感じていた。しかし「自己優先タイプ」の方が親の扶養に消極的であり、親の自立を期待していることが示唆された。

キーワード：自己犠牲，自己優先，扶養意識，介護負担感，女子青年

1. 問題および目的

生涯の中で、発達に伴い親子の関係は変化していく。特に青年期は心理的に親子関係が変化する時期とされている。落合・佐藤(1996)¹⁾では、その過程を「親が子どもを抱え込む関係／親が子と手を切る親子関係」、「親が外界にある危険から子どもを守ろうとする親子関係」、「子どもであった青年が困った時に、親が助けたり、励まして子どもを支える親子関係」、「子どもが親から信頼・承認されている親子関係」、「親が子を頼りにする親子関係」の5段階の心理的離乳段階を示している。しかし、この変化はあくまでも心理的な親子関係の変化であって、子にとって親が心理的な支えであり、子が問題を抱えている時には親が援助をするという、親子の力関係は変化することなく続いていく。その後、子が成人期後半にさしかかり、親が老年期になると、経済的にも物理的にも、また身体的にも子が親を世話をする立場となっていく。その時初めて扶養される側から扶養する立場へと変化し、実際的な親子の力関係が変化する。

この、子から親への経済的な援助や介護等の、子が親の世話をすること、面倒をみることに對する意識が扶養意識として研究されている。太田・甲斐(2002)²⁾では老親扶養義務感として老親が必要とする援助のうち、家族が提供できる援助として、経済安定のための援助、情緒的満足のための援助、保健のための身体的介護の3つを定義している。本研究でも太田・甲斐(2002)²⁾の概念に従って、扶養意識とは、老親が必要とするであろう経済的援助、情緒的援助、身体的援助の3つに對する義務感および積極的な意識を扶養意識として研究をすすめていく。

扶養意識は性別、年齢、属性などをはじめとする人口統計学的な要因によって説明されている。例えば、東野・桐野・種子田・八嶋・筒井・中嶋（2005）³⁾の研究では、扶養意識を扶養義務感として、介護をしている成人 1,091 名に調査を実施したところ、女性に比べて男性で老親扶養義務感が高い傾向にあることを報告している。また、三谷・坂本（1989）⁴⁾の研究では長男が親と同居し家を継ぐという「長男の伝統的同居規範」について、男性は消極的ながら肯定し、女性は否定的であるという性差を指摘している。田淵（2006）⁵⁾は日本家族社会学会全国家族調査委員会が実施した「第 2 回家族についての全国調査（NFRJ03）」データのうち 65 歳～77 歳回答者のデータを利用し要介護高齢者扶養について調査している。その結果、男性は「家族との同居」を志向する割合が高く、女性は「場合による」と回答する割合が高い。また、高学歴で「場合による」の回答が多く、60 歳以上の調査協力者は「施設」を選択する割合が高く、学歴や年齢による差も明らかにしている。Finley, Roberts, & Banahan（1988）⁶⁾は親との物理的距離（居住地間の距離）は遠くなるほど扶養意識は低くなるとしている。また、女性においては、実の父母、義理の父母両方に対して、時間的距離が遠いほど世話的支援は提供されにくく、実の父に対しては、時間的距離が遠いほど経済的支援が提供されにくいことが示されている（白波瀬、2005）⁷⁾。

扶養意識と心理的な要因との関連をみてみると、少し古いが前田（1979）⁸⁾の研究では、既婚女性の母との関係や生活満足度と扶養意識とのプラスの関連を指摘し、細江（1987）⁹⁾は、大学生の介護扶養意識と家族関係の情緒的要因とのプラスの関連を指摘している。杉山（2006）¹⁰⁾の研究では、大学生では親子関係が良好だと感じ、サポートを多く受けていると感じている者ほど、親の扶養に積極的な態度を示していた。さらに社会意識のうち「身近な事象への関心・社会的事象への無関心さ」が介護負担感と関連があり、親孝行の意識が積極的な介護継続意志と関連があったが、向社会的行動の頻度との関連はみられなかった（杉山、2009）¹¹⁾。

青年に「将来、親に扶養が必要となった時、誰が扶養するのがふさわしいか」と具体的な扶養者を尋ねると、37.8%が「自分」、次いで 20.0%が「きょうだい全員で」と回答しており、扶養意識の高さがうかがえる。その理由を問うと、「自分」という回答では、出生順位によるものや、長男が家を継ぐという慣習を挙げる学生が多かった。「きょうだい全員」という回答では、「全員の親なので、全員するのがふさわしい」というものだった（杉山、2006¹⁰⁾）。扶養にふさわしい者は誰か、という問いに対する回答結果だけみると、現在の若者が親の扶養に積極的な態度を持っているようにも思える。しかしその理由には「家制度」が全体的に支持されていた時代の慣習的な感覚が影響していると考えられる。

一方で中西（2009）¹²⁾の研究では、20 代男女の「将来親を介護するつもりがありますか」という問いにおける「いいえ」という回答の少なさ、「わからない」という回答の多さが指摘されている。この結果について、かつて家制度に基づく長男扶養規範が浸透していた頃であれば、子にとって老親介護への関与は選択できるものではなく、規範拘束的に規定さ

れるものであった。しかし現在の若者にとって、介護志向の表明は非常に曖昧なものとなっているためだと考察している。以前は親の扶養をすることは当然であり、それが社会的な規範、もしくは道徳的な問題であった。しかし、中西（2009）¹²⁾の結果から、現在は個人の自由も認められる問題へと変化してきていることがうかがわれる。

ある行動をするかしないかの道徳的判断や行動は、Turiel（1983）¹³⁾が提唱した社会的領域理論によって説明できる。社会的領域理論とは、人の社会的道徳的判断と志向性を作り出す認知の枠組みであり、道徳領域、慣習領域、個人領域の3領域から構成されている。道徳領域は、正義の概念を土台に構成される領域であり、他者の福祉、信頼、公平、責任や権利に関した場面でこの領域思考が働く。慣習領域は、家族や仲間集団、学校や会社などの社会システムの概念に基づいて構成される、学校や職場での規則、宗教儀式、礼儀作法などが含まれる。個人領域は、行動の影響が自分だけにあり、自己の統制下に置かれる行為である。しかし、実際には自己と他者の利益が同時に関与する場合など、複数の領域の要素を含む場面がある。例えば向社会的行動や自己管理の問題で、このような個人の自由や自己決定権と、社会道徳的要素の両方が含まれる場面での判断と自己決定は、個人一道德(personal-moral)の問題であると定義している（首藤、2003）¹⁴⁾。介護をはじめとする親の扶養の場面では、自分の要求と家族の要求が葛藤を起こすことが予想され、この場面での自己決定は身近な個人一道德の問題と分類できる。

首藤（2003）¹⁴⁾は、大学生248名に自己犠牲の意志決定と自己優先の意志決定を義務と自己決定の面からどのように判断するかを検討した。その結果、大学生は家族への献身場面での自己犠牲の意志決定を自分優先の自己決定よりも大切であると考えていた。大学生は個人の自己実現よりも家族との関係や家族の一員としての役割とそれに付随する責任の遂行を重要視することが示唆された。しかし、自己犠牲の義務感は自己優先の決定権よりも有意に低かった。

このような家族との関係における自己犠牲を優先させる態度が、杉山（2006）¹⁰⁾の研究で家制度を意識した回答、中西（2009）¹²⁾の研究での「わからない」の回答の多さ、さらに自己犠牲の義務感の低さが「わからない」という回答につながるものが推察できる。そこで本研究では、扶養を個人一道德の問題ととらえ、青年の自己犠牲と自己優先の意識と扶養意識との関連を検討する。

具体的には、次の2点について検討する。①自己犠牲・自己優先の意志決定を義務と自己決定の面からどのように判断するか。現代の大学生は自己優先的なのだろうか。②自己犠牲・自己優先の意志決定と扶養意識との関連を検討する。自己優先的な者は扶養に対して消極的に、自己犠牲的な者は積極的になるのだろうか。また、自己犠牲的、自己優先的な考え方は、扶養と必要となる状況や親の意思によって扶養の必要性をどのように判断するのだろうか。

なお、多くの扶養意識研究で性差が指摘されており、女子の扶養意識が高いことが示さ

れているため、本研究では女子学生に調査協力者を限定して調査を行った。

2. 方法

(1) 調査協力者

愛知県内の大学で資格関連科目を受講した文系の女子学生 72 名と、看護専門学校に通う女子学生 80 名の計 152 名。平均年齢は 19.9 歳 (SD=2.9)。

(2) 調査時期

2009 年 7 月～8 月。

(3) 調査項目

- 1) フェイスシート：年齢、性別について質問した。
- 2) 場面別の扶養の必要性：「あなたは次の状況で扶養が必要だと思いますか。」と問い、「親が一人暮らしになった時」「親が経済的に苦しくなった時」「親に介護が必要となった時」の 3 場面を想定してもらい、それぞれ「親が必要とすれば必要」か「親が必要としなくても必要」のどの考えに近いかわかり、回答してもらった。
- 3) 自己犠牲・自己優先の意志決定：首藤 (2003)¹⁴⁾ で使用された自己犠牲の例話 (A さん) と自己優先の例話 (B さん) (表 1 参照) を提示し、それぞれの例話に対して、「主人公の決心はどれくらい「大切」なことですか」(重要度)、自己犠牲場面：「妻は自分の仕事を犠牲にしてまで、夫の介護をすべきだと思いますか」(義務感) / 自己優先：「夫が妻の介護を優先させるか、仕事の成功を優先させるかは、最終的には夫が決めてよいことだと思いますか」(自己決定感)、「主人公は自分の決定にどれくらい「満足」していると思いますか」(満足度)、「主人公と同じ立場になったとしたら、主人公と同じ決心をしますか」(共感度) の 4 つの質問を行った。いずれも 4 件法で回答を求め、質問に対し肯定的な回答から順に 4 点から 1 点の得点を与えた。
- 4) 全般的扶養意識：杉山 (2010)¹⁵⁾ で使用された全般的扶養意識尺度を使用した。「親の面倒をみないと世間体が悪い」「高齢になった親の心の支えになるべきだ」などの全般的扶養意識に関する 11 項目について、「かなりそう思う」から「全くそう思わない」までの 5 件法で回答を求め、順に 5 点から 1 点までの得点を与えた。
- 5) 介護負担感：中谷・東條 (1989)¹⁶⁾ の作成した介護負担感尺度を使用した。「介護によって自分のために使える時間がもてなくて困る」など 10 項目で構成される「全体的負担感」因子と「介護はたいした重荷ではない」と「親を最期までみてあげたい」の 2 項目で構成される「継続意思」因子の全 12 項目に対し、「介護に関する記述に対してどう思いますか」とたずね、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」までの 5 件法で回答を求めた。回答には順に 5 点から 1 点の得点を与えた。

3. 結果

(1) 自己犠牲・自己優先の意志決定

1) 所属による差

調査対象者の所属別の自己犠牲・自己優先の例話に対する回答の分布を表1に示す。

表1 自己犠牲・自己優先の例話に対する回答の分布

		看護学生		大学生	
		度数	(%)	度数	(%)
自己犠牲					
Aさんの夫の父親は高齢の上体調を壊し自分で歩くことができなくなった。夫はAさんに父親の介護をしてほしいと思い、Aさんを説得した。Aさんは学校の教師を続けたいと思っていたが、夫の父親の介護のために、教職を辞めて家庭に入った。					
Aさんの決心はどれくらい「大切」なことですか（重要度）	全然大切ではない	0	(0.00)	1	(1.41)
	あまり大切とはいえない	6	(7.50)	9	(12.68)
	少し大切だと思う	27	(33.33)	20	(28.17)
	とても大切である	48	(59.26)	41	(57.75)
妻は自分の仕事を犠牲にしてまで、夫の父親の介護をすべきだと思いますか（義務感）	全然思わない	9	(11.11)	10	(14.29)
	あまり思わない	40	(49.38)	36	(51.43)
	少し思う	31	(38.27)	24	(34.29)
	そうすべきだと思う	0	(0.00)	2	(2.86)
Aさんは自分の決定にどれくらい「満足」していますか（満足度）	全然大きく満足していない	22	(27.16)	16	(22.54)
	あまり思わない	50	(61.73)	36	(50.70)
	少し満足している	9	(11.11)	16	(22.54)
	とても満足している	0	(0.00)	3	(4.23)
Aさんと同じ立場になったとしたら、Aさんと同じ決心をしますか（共感度）	しないと思う	8	(9.88)	5	(7.04)
	たぶんしないだろう	28	(34.57)	31	(43.66)
	だぶんするだろう	42	(51.85)	30	(42.25)
	すると思う	3	(3.70)	5	(7.04)
自己優先					
Bさんの妻は、事故に遭い車椅子の生活になった。その頃、ちょうどBさんは部長に昇進する話があった。しかし、部長になると仕事の量が増え、家に帰るのが遅くなる。Bさんは、工作中的の妻の世話を地域の福祉施設に依頼し、部長になることを決めた。					
Bさんの決心はどれくらい「大切」なことですか（重要度）	全然大切ではない	1	(1.23)	1	(1.41)
	あまり大切とはいえない	16	(19.75)	17	(23.94)
	少し大切だと思う	35	(43.21)	35	(49.30)
	とても大切である	29	(35.80)	18	(25.35)
夫が妻の介護を優先させるか、仕事の成功を優先させるかは、最終的には夫が決めてよいことだと思いますか（自己決定感）	全然思わない	0	(0.00)	2	(2.82)
	あまり思わない	19	(23.46)	17	(23.94)
	少し思う	41	(50.62)	40	(56.34)
	そうすべきだと思う	21	(25.93)	12	(16.90)
Bさんは自分の決定にどれくらい「満足」していますか（満足度）	全然大きく満足していない	1	(1.23)	1	(1.41)
	あまり思わない	24	(29.63)	16	(22.54)
	少し満足している	48	(59.26)	46	(64.79)
	とても満足している	8	(1.23)	8	(11.27)
Bさんと同じ立場になったとしたら、Bさんと同じ決心をしますか（共感度）	しないと思う	4	(4.94)	2	(2.82)
	たぶんしないだろう	28	(34.57)	33	(46.48)
	だぶんするだろう	41	(50.62)	30	(42.25)
	すると思う	8	(9.88)	6	(8.45)

看護師は人に尽くす仕事であり、それを目指す学生は自己犠牲的であるとも考えられるが、人数の分布にほとんど違いは見られない。自己犠牲の例話では、義務感と満足度で半数が否定的な反応をしている。反対に自己優先の例話では、自己決定感と満足度で半数が肯定的な反応をしており、自己優先の行動の方を認めていることがうかがわれる。

さらに自己犠牲・自己優先の質問項目のそれぞれの回答に得点を与え、自己犠牲・自己優先の意志決定が大学生と看護学校生との間に違いがみられるか検討するために *t* 検定を行った。その結果「自己犠牲の満足度」のみで有意な差がみられ ($t(150)=2.18, p<.05$)、大学生の得点が高かったが、自己犠牲・自己優先の意志決定に両者間でほとんど差はみられないと言える。これらの結果から、大学生と看護学校生に違いがみられないと考え、以降の分析は 152 名をまとめて分析していくこととする。

2) 自己犠牲と自己優先の肯定度

重要度、義務感－自己決定感、満足度、共感度それぞれの質問に対し、自己犠牲・自己優先のどちらの得点が高いか検討した。その結果、重要度 ($t(151)=6.64, p<.001$)、義務感－自己決定感 ($t(151)=8.48, p<.001$)、満足度 ($t(151)=11.28, p<.001$) で有意な差がみられ、重要度では自己犠牲の得点が高かった。また、義務感－自己決定感および満足度では自己優先の得点が高かった。

3) 判断間の関連

表 2 に 4 つの判断間の相関係数を示した。自己犠牲・自己優先の共感度が重要度、義務感－自己決定感、満足度の判断と関連している。また、自己犠牲の義務感が高いものほど、判断の満足度が高く、共感度も高かった。

表2 判断の相関

	Aさん自己犠牲	Aさん満足	Aさん共感	Bさん重要度	Bさん自己優先	Bさん満足	Bさん共感
Aさん重要度	.083 n.s.	.152 n.s.	.162 *	.464 ***	.004 n.s.	.140 n.s.	-.174 *
Aさん自己犠牲	—	.436 ***	.572 ***	-.071 n.s.	-.029 n.s.	-.056 n.s.	-.115 n.s.
Aさん満足		—	.265 **	-.143 n.s.	-.031 n.s.	-.004 n.s.	-.169 *
Aさん共感			—	-.047 n.s.	-.071 n.s.	.099 n.s.	-.152 n.s.
Bさん重要度				—	.140 n.s.	-.002 n.s.	.170 *
Bさん自己優先					—	.070 n.s.	.383 ***
Bさん満足						—	.226 *

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

(3) 扶養意識と自己犠牲・自己優先の意志決定

1) 全般的扶養意識の因子分析

全般的扶養意識を測定した 11 項目について、杉山 (2010) に従って 3 因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、老親自立期待因子、情緒的支援志向因子、伝統的扶養志向因子の 3 因子に分類され、先行研究と同様であった (表 3)。違う母集団での結果において同様の結果が得られたことから、この尺度はおおよそ妥当であ

ると言えよう。因子分析の結果に基づき、各項目得点を合計して3因子それぞれの合成得点を算出した。

表3 全般的扶養意識の因子分析結果（主因子法・Promax回転）

	I	II	III
老親自立期待 $\alpha = .75$			
3. 親の介護は、子どもでなくても訪問看護などのサービスで十分だ	.782	.141	-.167
10. 身の回りの世話などは、基本的には親の経済力でまかなえばよい	.623	-.053	.196
6. 経済的な扶養をしていれば、同居はする必要はない	.614	-.031	.041
11. 親はできるかぎり子どもに頼らず暮らすべきだ	.518	-.077	.062
7. 健在な親とは電話や手紙などで連絡を取ってさえいればよい	.503	-.160	.125
2. 高齢になった親は設備の整った施設に入れる方がよい	.477	.107	-.157
情緒的支援志向 $\alpha = .68$			
4. 親を旅行に誘ったり、楽しみの機会を用意すべきだ	.044	.702	.059
5. 高齢になった親の心の支えになるべきだ	-.111	.683	-.011
伝統的扶養志向 $\alpha = .54$			
1. 親の面倒をみないと世間体が悪い	.089	-.073	.547
9. 自分が親の扶養をすれば、 将来子どもも自分たちの扶養をしてくれる	.126	.132	.527
8. 子どもが親の老後の面倒をみるのは当然だ	-.210	.155	.442
因子相関行列	I	II	III
I	—	-.484	-.543
II		—	.408
III			—

2) 全体的扶養意識と自己犠牲・自己優先との関連

全般的扶養意識と自己犠牲・自己優先の共感度との関連を検討する。共感度は自己犠牲・自己優先ともに、判断が分かれていること（表1）、さらにその他の意志決定とも関連がある（表2）ことから、共感度のみを独立変数として用いることとした。自己犠牲および自己優先の例話において、主人公のとった行動を「すると思う」「たぶんするだろう」の共感タイプと「しないと思う」「たぶんしないだろう」の非共感タイプに分けた。この結果から「自己犠牲共感」タイプ39名、「自己優先共感」タイプ44名、「どちらにも共感」タイプ41名、「どちらにも共感しない」タイプ28名に分類した（表4）。

共感度の分類をもとに、全般的扶養意識の共感度による差を検討するために分散分析を行った（表5）。その結果、「老親自立期待」では「自己犠牲共感」タイプよりも「自己優先共感」タイプの得点が高く、

表4 主人公の行動への共感度

	自己優先の行動		合計
	非共感	共感	
自己犠牲の行動	28	44	72
自己優先の行動	39	41	80
	67	85	152

「伝統的扶養志向」では「自己優先共感」タイプよりも「自己犠牲共感タイプ」の得点が高かった。このことから、個人一道德の問題で自己優先するタイプは親に自立を期待し、自身も子に扶養は期待していないこと。反対に、自己犠牲をするタイプは扶養することを

当然のことと考えており、周囲からも子が親を扶養することを期待していると感じていることの2点が示唆される。

表5 全般的扶養意識×共感度の分散分析結果

	自己犠牲共感		自己優先共感		どちらも共感		どちらにも共感しない		
	n	平均値 (SD)	n	平均値 (SD)	n	平均値 (SD)	n	平均値 (SD)	
老親自立期待	39	13.95 (3.02)	44	16.70 (4.66)	39	15.46 (3.45)	28	15.79 (3.79)	3.67 *
情緒的支援志向	39	9.08 (1.06)	44	8.77 (1.48)	40	9.23 (0.77)	28	8.71 (1.36)	1.54
伝統的扶養志向	39	10.05 (2.06)	44	7.95 (2.50)	41	9.24 (2.13)	28	9.21 (2.23)	6.22 **

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

3) 扶養場面別扶養の必要性と自己犠牲・自己優先の意志決定

「親が一人暮らしになった時」「親が経済的に苦しくなった時」「親に介護が必要となった時」の3場面の回答を用いて、グループ内平均連結法によるクラスタ分析を行い、3つのクラスタを得た。第1クラスタには41名、第2クラスタには28名、第3クラスタには79名の調査対象者が含まれていた。 χ^2 検定を行ったところ、有意な人数比率の偏りがみられた ($\chi^2(2) = 28.43$, $p < .01$)。

「1人暮らしが必要になった時」ではほとんどの者が「必要とすれば必要」と回答しており、1人暮らしになった時の扶養は、全体として親の意向に任せるという考え方の者が多い。第1クラスタは「介護が必要になった時」においても「必要とすれば必要」という回答していることから「親の意志尊重志向」群とした。第2クラスタは「経済的に苦しくなった時」には「必要とすれば必要」、「介護が必要になった時」において、「必要としなくても必要」と回答していることから「介護負担志向」群とした。第3クラスタは「経済的に苦しくなった時」「介護が必要となった時」とともに「必要としなくても必要」と回答していることから「高扶養負担志向」群とした。女子学生の多くは「高扶養負担志向」に属しており、扶養意識の高さがうかがえる。

各クラスタで、自己犠牲・自己優先に対する共感度の人数の分布をみた(表6)。その結果、「親の意志尊重志向」群

で有意な差がみられ、自己犠牲共感タイプが少なかった。「親の意思尊重志向」群は、親の意思を尊重するという態度の裏に自己優先的な態度も隠れていると言える。

表6 クラスタごとの共感度の度数分布

	自己犠牲共感	自己優先共感	どちらも共感	どちらにも共感しない	χ^2
親の意志尊重志向群	2	15	14	10	10.22 *
介護負担志向群	9	9	7	3	3.43
高扶養負担志向群	27	19	20	13	5.00

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

4) 介護負担感と自己犠牲・自己優先行動の共感度との関連

介護負担感項目12項目について、中谷・東條(1989)に従って、「全般的負担感」と「継続意志」因子に分類した。介護負担感の共感度による差を検討するために分散分析を行っ

た。その結果、「全般的負担感」において有意な差がみられた。しかし、その後の下位検定では有意な差がみられなかった。

4. 考察

(1) 自己犠牲・自己優先の意志決定の判断について

自己犠牲の行動の方が決定の重要度、自己決定感や満足度では自己優先行動の得点が高く、自己優先の行動の方を認めていることがうかがわれた。しかし、自己優先の例話に対する回答の分布を見てみると、「あまり思わない」や「少し思う」といった“どちらかといえば”という態度の選択肢に集中している。したがって、今回の調査協力者が自己優先的な傾向を示していることは確かであるが、自己優先タイプだとまでは言い切ることはできない。大学生にとっては自己を犠牲にするかどうかは重要な問題ではあるが、自己を犠牲にすることよりも自己を優先したときの方が満足感を得るようである。自分以外の人を思いやりつつも、“まずは自分”という結果である。

しかしその意思決定の判断は首藤(2003)の大学生の結果と同様の傾向がみられており、この数年では学生の自己犠牲・自己優先の特徴は変化していない。したがって近年若者の身勝手な行動が報道されることもあるが、10年前と比べても最近の大学生が特に自己優先的になってきているとは言えないだろう。

(2) 扶養意識と自己犠牲・自己優先の意志決定について

それぞれの因子と自己犠牲・自己優先との関係を見てみると、「老親自立期待」では「自己優先共感」タイプの得点が高く、「伝統的扶養志向」では「自己犠牲共感タイプ」の得点が高くなった。また、扶養場面を想定した扶養意識のクラスタ分析の結果から「親の意志尊重志向群」で「自己犠牲タイプ」の人数が少なかった。これらの結果から、その他の結果でも明らかのように、「自己犠牲タイプ」も「自己優先タイプ」も同じように扶養の必要性は感じているものの、「自己優先タイプ」の方が親の扶養に消極的であり、親の自立を期待していると言える。

その理由としては、ある種の“罪悪感”の軽減が考えられる。因子分析の結果にもあるように、現代の大学生にも子どもが扶養するのが当然であるという伝統的な扶養の意識も残っている。したがって、親の扶養を全くしないということは周囲に対する気まずさや親に対して罪悪感を感じる行為であると推測される。しかし、自分の生活を優先させたい「自己優先タイプ」では、「自らが扶養をしないという選択をしたわけではなく親が扶養を必要ないというからしないのだ」と考えて気まずさや罪悪感を軽減させたいのではないだろうか。

また、「自己優先共感タイプ」と「どちらにも共感しないタイプ」には「全体的介護負担感」が高かった。したがって自己優先的な意識よりも、自己犠牲することをどう考えるかが介護負担感と関連があると考えられる。介護場面での自己犠牲的な行動に共感できるた

めに負担感を少なく見積もっているのか、負担感が少ないために自己犠牲的な行動に共感できるのかについては検討が必要である。

(3) 今後の課題

今回の調査において、個人―道徳の問題によって、扶養に対する態度をある程度予測することが可能であることが示された。扶養意識の先行研究では、人口統計学的な要因を扱っているものが多く、心理学的要因といえば主に親子関係である。従って、本研究で扶養に対する態度を規定する要因について新しい知見を提示できたと思われる。今後は個人―道徳の判断の精度を上げていくとともに、新たな心理学的な要因についても検討していきたい。

なお、今回の調査では自己犠牲・自己優先のどちらにも共感する学生は41名、どちらにも共感しない学生は28名であり、計69名がどちらのタイプにも判別できない学生であった。今回は自己犠牲場面、自己優先場面のいずれも1つの例話によってタイプ分けをしているため、曖昧なタイプの学生が判別できなかったと思われる。今後は例話を増やすなどしてこの曖昧なタイプの学生のタイプ分けの精度をあげていくことが必要であろう。さらにどちらにも判別できなかった学生の扶養意識の傾向にも注目していきたい。また、今回の調査は質問紙調査のため、それぞれの回答の理由付けについては言及していない。しかし、どのように考えて回答したかについては注目すべき点である。一般的な傾向を調査するだけでなく、個人がどのように考えているかなど文脈の中で検討する必要性もあり、面接調査を通して詳細な分析をしていきたい。

引用文献

- 1) 落合良行・佐藤有耕 (1996) : 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析, 『教育心理学研究』, 44(1), 55-65.
- 2) 太田美緒・甲斐一郎 (2002) : 老親扶養義務感尺度の開発, 『社会福祉学』, 42(2), 130-138.
- 3) 東野定律・桐野匡史・種子田綾・八嶋裕樹・筒井孝子・中嶋和夫 (2005) : 介護者における老親扶養義務感と人口学的要因の関係, 『厚生指標』, 52(2), 1-6.
- 4) 三谷鉄夫・坂本佳鶴恵 (1989) : 老親扶養意識に関する研究, 『高齢社会研究』, 5, 49-64.
- 5) 田淵六郎 (2006) : 高齢期の親子関係, 『季刊家計経済研究』, 70, 19-27.
- 6) Finley, N. J., Roberts, M. D., & Banahan, B. F. (1988) : Motivators and inhibitors of attitude of filial obligation toward aging parents, *The Gerontologist*, 28(1), 73-78.
- 7) 白波瀬佐和子 (2005) : 『少子高齢化社会のみえない格差―ジェンダー・世代・階層のゆくえ―』, 東京大学出版会, 東京.

- 8) 前田大作 (1979) : 大都市青壮年の老人観および老親に対する責任意識, 『社会老年学』, 10, 3-22.
- 9) 細江容子 (1987) : 親の老後に対する大学生の扶養意識, 『老年社会科学』, 9, 96-108.
- 10) 杉山佳菜子 (2006) : 大学生の扶養意識と介護負担感, 『東海心理学研究』, 2, 63-70.
- 11) 杉山佳菜子 (2009) : 青年の自己犠牲・自己優先と扶養意識, 『日本発達心理学会第21回大会発表論文集』, 633.
- 12) 中西泰子 (2009) : 『若者の介護意識 親子関係とジェンダー不均等』, 勁草書房, 東京.
- 13) Turiel, E. (1983): *The development of social knowledge: Morality and convention*, Cambridge, England: Cambridge University Press.
- 14) 首藤敏元 (2003) : 子どもの生き方としての個人道德の発達, 『平成12年度～平成14年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書』.
- 15) 杉山佳菜子 (2010) : 成人子とその親子関係—子世代からみた老親扶養意識を中心に—, 『老年社会科学』, 31(4), 458-469.
- 16) 中谷陽明・東條光雅 (1989) : 家族介護者の受ける負担—負担感の測定と要因分析—, 『社会老年学』, 29, 27-36.

執筆者の所属と連絡先

所属 : 鈴鹿大学短期大学部 Email : sugiyamak@suzuka-jc.ac.jp

Self-sacrifice, self-priority and filial responsibility of the female adolescence

Kanako Sugiyama

Abstract

This present study examined the female student's judgment of self-sacrifice and self-priority in the story about care of family, and her relation to filial responsibility. 152 female students (mean age 19.9 years) participated in the study. In importance, the score of self-sacrifice action was higher than self-priority. In flexibility of determination and satisfaction, the score of self-priority action was higher than self-sacrifice. From this they approve of self-priority, but they were not necessarily more self-priority than students of 6 years before. Both self-sacrifice types and self-preference types felt a necessity to support parents. The self-priority type was reluctant to support their parents. They also expect parents to be independent.

Key Words: Self-sacrifice, Self-priority, Filial responsibility, Caregiver burden, Female adolescence